

主を深く知る

ホセア 6:1~3

来週から待降節、アドベントに入ります。教会暦はアドベントから始まりますから教会のカレンダーから言いますと今日が一年の最後の主日となります。クリスマスとはご存知のようにキリストを礼拝するという意味です。一年を振り返りながらキリストを正しく礼拝できるように心備えてゆきたいと思えます。鍵になることばは「主を深く知る」ということです。今年のテーマは「実りと成長」ですが根底にあるのはどれだけ主を深く知ることが出来たか？ということ。祈っていたことがかなえられた、かなえられない。それは大切なことでしょう。しかし、その中で神様を、主をどれくらい深く知ることができたのでしょうか？ 今日ホセア書から主を知ることについて主の御心を知りたいと思えます。

1. 主を知ろうとしない社会

今朝の3節の箇所は、かぎかっこの中に入っています。このかぎかっこは、引用された言葉を表わしています。これは神殿で祭司が祈る言葉で、イスラエルの人々が良く知っていた言葉でした。預言者ホセアは、その祈りの言葉を引用して、イスラエルの人々に「主を知ることが切に求めよう」と訴えているのです。なぜ、そう訴える必要があったのでしょうか。それは人々が「主を知ること」よりも別のものを求めていたからです。

ソロモン王ののち、イスラエルは南北に分かれました。紀元前930年のことです。ホセアは、北王国の預言者で、ホセア1:1によると、「ヨアシュの子ヤロブアムの時代」の人であることが分かります。「ヨアシュの子ヤロブアム」というのは、歴史家たちがヤロブアム二世と呼んでいる王で、紀元前786年から745年、北王国を治めました。ヤロブアム二世の時代、北王国は領土を拡大し、経済的に栄え、貿易が盛んに行われていました。北王国の首都サマリヤの発掘が行われたとき、ヤロブアム二世の時代に作られた壮麗な建物の一部や、象牙などの高価な輸入品が数多く見つかっています。

しかし、その繁栄の陰で、道徳が乱れ、社会に不正がはびこりました。富める者が富を独り占めし、貧しい人はさらに貧しくなるという「格差社会」が生まれました。国は、もっと多くの領土を得ようと、まわりの国々に戦争をしかけました。そして、なによりも、人々は神を求めなくなりました。

人が悪いことをしたり、互いに争ったりするのは、貧しさのゆえであり、国が経済的に発展し、人々が豊かになれば、世の中は平和になり、人々は幸せになると言われます。それは、ある程度は当たっているかもしれませんが、かならずしも、正しいわけではありません。国も、人も、豊かになったら、もっと多くの領土、資源、富を手に入れようと、他と争うようになります。人々が「富」を追い求め、「神」を忘れるとき、道徳は乱れ、社会から正義や公平が失われていき、世界は混乱します。今、わたしたちは、神を忘れた社会、神を求めない世界の姿を目の当たりにしています。

2. 主を知ろうとしない時代

預言者の役割、それは人々が見失っているものを示すことです。預言者ホセアも、人々が見失っていたものを指摘しました。人々が見失っていたもの、それは、ひととこと言え、主を知ることでした。ホセア6:6に「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることが喜ぶ。」とあります。人々は家畜を神に捧げて礼拝をしていました。牧畜をなりわいとするイスラエルの国では、家畜は貴重な財産でした。子牛一頭、小羊一匹だけでもとても高価なものでした。古代のイスラエルで子牛や子羊を育てるのには、大変な手間がかかったことでしょうから、それはとても価値あるものでした。人々はそれを神に捧げました。大変な犠牲を払ったのです。それなのに、その心には神への誠実も、神を求める思いもありませんでした。神が人にこうした捧げものを求められたのは、神への感謝や悔い改め、また献身を表わすためでした。ところが、人々はただ形式的にそれを守らただけで、その意味を考えたり、それを定めてくださった神のみこころを知ろうとはしませんでした。また神への感謝の応答としての捧げものがいつのまにかこちらが捧げるものに神はどのように応えてくださるのかを見るような

具合でした。そんな具合ですから、まして、自分を顧みて、悔い改めることもなかったのです。商売人たちは、いちおうは安息日を守っていました。しかし、安息日を守りながら、アモス 8:5-6 には「新月の祭りはいつ終わるのか。私たちは穀物を売りたいのだが。安息日はいつ終わるのか。麦を売りに出したいのだが。エパを小さくし、シケルを重くし、欺きのはかりで欺こう。弱い者を金で買い、貧しい者を一足のくつで買い取り、くず麦を売るために。」つまり“早く安息日が終わればいいのに。そうしたら、また不正なことをして、ひと儲けしてやろう”などと心の中で考えていたのです。

こうした聖書の時代の人々のことを考えながら、これから迎えるクリスマスに、現代のわたしたちはどのように迎えるべきかと考えます。私達はクリスマスを出来るだけ盛り上げようとします。しかし、どれだけの人が、クリスチャンと呼ばれる人でも、「クリスマス」を（キリストへの礼拝）として守っているだろうか、クリスマスの賛美を歌うように、キリストを心に迎え入れているだろうか、「行きて、拝せよ」と歌うように、飼葉おけのキリストの前にひざまずいているだろうかと思わされます。東方の博士たちが、キリストを求めてはるばる旅してきたように、熱い思いをもってキリストを求める人がどれほど起こされることでしょうか。クリスマスには、キリストの名が人々の口にのぼります。聖書の物語が語られます。それはうれしいことです。しかし、もし、クリスマスが飲んで、食べて、歌って、楽しむだけのものだとしたら、とても寂しく思います。クリスマスにご自分の御子を送ってくださった神にたいして申し訳ないと思います。クリスマスこそ、神がそのひとり子をお与えになったほどに、わたしたちを愛してくださった、その愛を想うときです。神の御子がわたしたちの心に生まれてくださる日です。

宗教行事はあっても、そこに心が伴わないのは、預言者ホセアの時代だけでなく、現代も同じです。「わたしたちは知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。」ホセアが今の時代にいたなら、きっと、わたしたちにも同じ預言をしたことでしょう。いや、いつの時代にも変わらない聖書の言葉が、今、わたしたちに「主を知ることを切に追い求めよう」と語っています。わたしたちは、この言葉を聞き、見失っていたものを取り戻したいと思います。

3. 主を知ろうとしない信仰者

しかし、聖書が、「主を知れ」と語っているのが、イスラエルの人々に対してだったことは、不思議と言えば不思議なことです。イスラエルの人々は、他の民族が石や木を削って偶像をつくり、それを神々として拝んでいた時代に、神に選ばれ、唯一の生ける神、「主」を知る者とされていました。イスラエルの人々は、神が世界の創造者であり、それを支え、導いておられる方であることを知っていました。人を憐れみ、罪を赦し、ご自分との親しいまじわりの中に導きいれてくださる、恵み深いお方であることを知っていました。わたしたちの祈りを聞き、信じる者に報いてくださるお方であることも知っていました。つまり神についてかなり知っているのです。しかし、ホセアが預言した時代には、それは、たんなる知識で終わってしまっていたのです。主を人格的に、体験的には知っていなかったのです。本来、主を知っているはずの人々の心に、主はおられなかったのです。

わたしたちが誰かを「知っている」という場合、その人の経歴などの個人データを持っているからといって、それはその人を「知った」ことにはなりません。最近は便利な時代で分からない言葉や語句があればすぐにスマートホンで検索すれば分かります。しかし毎日、毎週、テレビでその人の顔を見ていても、その人が書いた本を読んでも、スピーチを聞いてもその人と親しく言葉を交わし、会話するのなければ、その人に「会った」ことにはなりません。ただのうんちくを語る人ということです。同じように「主を知る」というのも、単に「神について」の知識を蓄えることではないのです。もちろん、知識は要らないというわけではありません。知識は多ければ多いほうが良いのですが、「主を知る」というのは、もっと人格的なことです。主がわたしたちを愛しておられる、その愛を受け入れ、それに答えて、主を信頼していくことです。こればかりは牧師がどんなに頑張っても、出来るだけ聖書を正しく語ったとしても、少し

の励ましと導きにはなるでしょうが信仰者自身、主がわたしの人生を導き守ってくださるとの信仰、信頼がそこになかったら、それは単なる形式で終わってしまいます。どんなに高価なものを、数多く捧げたとしても、たとえ犠牲を払ったとしてもへりくだって、赦しを求めるのでなければ、神の恵みを味わうことはできません。神の言葉を聞き、それに答えて祈る、御言葉と祈りの中で神と対話するのでなければ、主にお会いしたことにはならないのです。

名前だけの信仰者は、そうした意味での「主を知る」ことに興味も関心も示しませんでした。しかし、まことの信仰者は、それを求めてやみませんでした。詩篇 42:1-2 は「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましようか。」と歌っています。「神の御前に入る」には「神の御顔を見る」ということばが使われています。「顔」は神のご人格を表わしています。神は、物体でも、エネルギーでも、理論でもありません。「顔」を持ったお方、ご人格です。人はその喜怒哀楽を顔で表わしますが、神もまた、喜怒哀楽をお持ちのお方であり、それを人に伝えてくださるのです。「神の御前に入る」「神の御顔を見る」とは、神との生きた人格の関係を持つということです。詩篇 27:8 にこうあります。「あなたに代わって、私の心は申します。『わたしの顔を、慕い求めよ』と。主よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。」このように、主が「求めよ」と言ってくださる神とのまじわりを求めること、それが「主を知ること」を求めることです。

「主を知ること」は、特別な人だけに許されたことではありません。それは、ふつうの信仰者に手の届かないものでもありません。求める者に必ず与えられます。主が「わたしを求めよ」と言っておられるのですから。ホセア 2:19-20 で主はこう約束しておられます。「わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは主を知ろう。」主が結ぶと言われた「ちぎり」とは「結婚の約束」、「婚約」のことです。これは、今、イエス・キリストによって成就しています。聖書はイエス・キリストを信じる者はキリストの花嫁となると教えています。つまりキリストを見知らぬ人としてでなく、愛するお方として知るので、いつまでも躊躇せず、今、主の愛に答えましょう。そこから「主を知る」ことがはじまるのです。

最初に言いましたように教会暦では来週のアドベントから新しい年が始まります。礼拝だけでなく、その後のまじわりにおいても、どんな奉仕の活動においても、すべての集会で、「主を知ること」を第一の目的としましょう。この目的を忘れると、教会の集まりが、集まりそのものを楽しむだけのものになり、活動が活動のための活動で終わってしまいます。そうならないように、いつも、「私たちは、知ろう。主を知ることが切に追い求めよう。」との御言葉を覚えていきましょう。個人で聖書を読み、祈る時も「主を知ること」をせつに求めて、そのことに励みましょう。